
ヌクモリ

工藤 香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヌクモリ

【Zコード】

Z9983B

【作者名】

工藤 香

【あらすじ】

これは本当にあった話。大切なモノは、近すぎて気付かなかつた昔の事。そして、大切なモノを失つた今、後悔だけを残していたアタシは一生の宝物だけをもち、生きている。

出余い

これは

本当のアタシの実体験

過去がやっと整理できた

だから

アタシの再出発のため

思い出を整理するために

書きます。

逢いたくて

逢いたくて

逢いたいから逢いに行き

時間がなくとも逢いに行く

時間がないのが
わかつていても

逢つてしまつと

離れる事ができなくなつてしまつ

でも

アタシをそんな気持ちにさせる男は

アタシの男ではないし

2度と逢つ事もできない。

最悪な奴

その男がアタシの人生に関わり始めたのは

アタシが中学3年の時

今でもあの日の事は

忘れる事が不可能な程

衝撃的な出会いだった

その年の夏は
それまでの夏と
変わらない暑さで

あの日、だって
長い一生のうちの
普通の一日常すぎない
はずだった。

アタシは兄の悠布に

届けモノをしに

悠布の住むマンションに
向かって自転車を飛ばした
兄の悠布は

自分と親の

考え方の不一致から

家を出て、今は

祖母の持つマンションに住んでいた

親に逢いたくてないため

実家に置いてあるモノで

必要なモノを届けてほしいとアタシは、たまに頼まれていた

マンションの前に

自転車を置き

自動ドアを抜けた

いつも思つ

オートロックは面倒だと

部屋番号を押しても

兄がでる事は
ほとんどない

仕方なく

鞄の中からリモコンを探しました自動ドアを抜ける

少しベージュがかつた

エレベーターは

光を反射しアタシの後ろで動くモノを映していた

いかにもホストのような男が近づいてきていた

エレベーターは

あと少しでアタシの元へ来る

アタシは何故か

その男とエレベーターに乗るのが嫌で携帯に田を落とした。

エレベーターが到着した時

アタシは返信の必要のない

メールを見て携帯から田をはなさず、

その男が

アタシを無視して

行つてくれればイイと

願つていた

でも

その男は以外に律儀で

『開』のボタンを押し

アタシが乗り込むのを待つていた

それを

わかつていただけど

何かがアタシを止めていた

気まずい沈黙が続き

遂に痺れをきらした男は

「来てんの、わかんねーの？ テメーみてえなガキに手だすほど困つ
てねえんだよ！ いらねえ妄想ばっかしてんじゃねえよ」

初対面の相手に言つとは

常識では考えられない程の言葉を発した

一瞬だつたけど

一分くらいは沈黙したまましばらくアタシ達は目がかちあつていた

やつとの思いで

絞り出したアタシの声は
どこか怒りで震えていた

「そんなん思つならアタシを無視していけばよかつたじゃん！大体
もう一つエレベーターあんだから平気なんだよ」

「…………乗れ」

その言葉で

仕方なくアタシはエレベーターに乗った

アタシの押そうと思ったボタンは、すでに光つていて
その男も同じ階にいく事がわかり嫌気がした

17階に着いた時

アタシは兄の部屋のある

角部屋まで競歩でいき

カードキーでドアのロックを解除しドアを勢いよく開け同じくらい
強くしめた。ドアを開けてスグに

煙草や食べ物やお酒の

混ざった臭いがして

奥からは知らない声ばかりしていた

廊下の奥の部屋には

案の定、悠布と同じ夜の世界で生きている人達がいたその中の一人
の男は

「あ～香ちゃん悠布に用事～？」

「うん。悠布は隣？」

「ん~いるけど一人じゃないから後でにして」ツチでお兄さんと話
そつ~」

「今日はイイや。じゃあ悠布が終わったらコレ渡しておいて? アタ
シ帰るね」

部屋のドアを開けると

玄関のドアを開けて

廊下をズカズカ歩いてくる男がいた

それはさつき
エレベーターで逢った

常識を超えた失礼な男だった

第2話 辰弥

辰弥

その男は廊下の奥の部屋に突っ立っていたアタシに気が付いて

「お前悠布の女だったん？ ガキしきてわからなかつたや？ 「ゴメンな
あ」

「ゴメン」とこう言葉は謝る時に使うモノなのに

微塵も謝っている感が感じ取れなかつた

この男はどこまで失礼なんだという思いと

関わったくない想いが
交じり合つて

アタシはその男に体当たりするように家を出た

エレベーターを待つていると当時付き合つていた辰弥が降りてきた。

今までの出来事のせいだ辰弥の声が優しさを帯びていた

「来てたん？ 遅いから送つてく

「今日はいいよ？自転車だし。悠布の友達にアンナ失礼な奴がいると思わなかつた。一度と逢いたくない」

「ハハハ。誰の事？お前が嫌いつていうの初めてだな？」

「名前知らないけど本当に失礼な奴！ああホストっぽい奴！」

「ん~？思ひ当たる奴いすぎてわかんねえや。でも、今日はマジ遅いから送る。いくぞ~？」

4歳年上の兄の悠布は大学を中退してからホストをしていた。

辰弥は悠布の仕事仲間でヤケに意氣のあつた二人は

よく悠布のマンションで飲んでいた

アタシもよく悠布のマンションに出入りしていたため何度も逢つうちに

アタシは辰弥の優しさにひかれ、辰弥はアタシの間抜けぶりがほつとけず目で追つてたと

一見全く告白には聞こえない告白してくれた

その日は辰弥に送つてもらい家に帰つた。

第3話 距離感

距離感

中学3年の秋。

アタシには受験が迫っていた
兄と辰弥は中退したが
通っていた大学は有名な
私立大学だった

アタシは、そんな2人に
勉強を教えてもらつため

悠布のマンションに通っていた

あの日は
次の日が休みだったから

アタシは悠布の部屋に泊まる事になつていた

悠布達が仕事に行く時間

辰弥が、おもむろに

机に大量のA4の用紙をおいて、何気ない声で

「これ簡単だから5教科全部やつとくんだぞー。じゃ
その台詞を置いて

二人は出掛けていった

夜中に玄関のドアが開く音がした時本当に嬉しかった
辰弥の置いていった宿題は以外に難しくて解説がほしかったのもあ
つたが

何より夜中に広いリビングで一人でいるのは淋しかった

そのためだつたんだろう

一人が仕事から帰るには
早すぎるとは感じつつ

アタシは満面の笑みで

「『』苦労様～。早かつたね～？ねえ宿題教えて～？わっかんないの」

アタシは自分の行動を反省した事は沢山あつたけど

この時は自分の顔が真っ赤になるのがわかる程恥ずかしかった

玄関で不意を突かれたように立っていたのは

少し前にエレベーターで逢つた失礼な男だった

男は

「本当聞いた通りの奴だな」
ぶつきらぼうに
それだけ言って

アタシの横を通り抜け
リビングに入つていった

恥ずかしさと

また逢つた後悔に近い

イライラが残り

アタシは、しばらく
玄関に立つていた

顔の赤みを感じながらもフランフランリビングに戻ると
その男はアタシの宿題の穴を見ていた

「今は悠布と辰弥だと思ったから話しかけちゃったのー宿題は悠布
達に見てもうから気にしないで」

慌てて言つアタシに

その男は冷静に

「一回しか説明しないからなあ」

意味が飲み込めない
アタシを無視して

その男は説明を始めた

男の説明はわかりやすかつた

それが逆に気に入らなかつたけど

アタシはその男の手から口が話せなかつた

男の手は「ゴツゴツ」して男らしい手なのに

解説をしてるときの

指の運びがしなやかで

細長い指を際立させていた

そんなアタシに気付いたのか只嫌みを言いたかったのか

男は、半ば呆れながら

「聞いてんの？ 大体何でコツチの難しい方が解けて基本が解けねんだよ？ どうゆく解き方してんだ？」

男は怒りながらも
丁寧に教えてくれた

4教科目の解説をしてもらつてる時

悠布達が帰つて来た

辰弥は男を見て

「優大^{まさひろ}? 来てたん? お前^{やよい}弥生ちゃんが探してたぞ[〜]? 」

「いかねえよ? 面倒なつてきたから終わり[〜]」

「俺^らに迷惑かくんなよ[〜]? 」

「なるべく[〜]氣いつけ^るや」

辰弥と優大と呼ばれた男が何の話をしていたかは詳しくわからなか

つたが

女の事だらうという想像はそれなりについた

悠布が机を見て

「何優大？香の勉強見てたん？意外だなハハハ

「（）に着いた瞬間コイツに頼まれた」

「違うよ？悠布と辰弥だと思つたから・・・

その言葉を聞いた悠布と辰弥に

「間抜けだなあ」

「笑いをこらえながら

咳かれた。

「おい、集中しろよ。お前飲み込みおせんだよなあ

「あのさ、優大君だつけ？スバルタすぎるから後は優しい優しい辰
弥に教えてもらうね？怖かつたけどわかりやすかったよ？ありがと
ね？」

その時優大と呼ばれた男は急に笑顔になつて

「ハハハ！どういしました～」

優大君の日本語は時々
変だと思つけど

アタシはその笑顔がツボだつた
その日をキッカケに
悠布のマンションで
優大君と逢つた時は

いろんな話をするようになり

兄が一人増えたような感じだつた

第4話 優大君

優大君

優大君はアタシが何か言つ度に爆笑しながら話を聞いてくれた

でもあの頃

優大君は自分の事はあまり話さなくて

何をやつてる人なのか

悠布と辰弥と仲がよくなつた経緯とかを

話そつとはしなかつたけど
人には、いろんな人がいて
どんなに親しくても

大事なモノの価値観は
ミンナ違っている事を

アタシは子供ながらに
実感していた。

それにアタシには

仲良くなつた人の過去は重要ではなくて

相手が話したい時に

話してくれれば
イイと思っていた

だから優大君が

何も自分の事を話さない事は気にする事ではなかつた
高校の合格発表の日

普段は緊張する事なんて

あまりにも無むすぎたアタシは

吐き気に襲われていた

朝。家に来た辰弥は

アタシの蒼白な顔を見て

「見てきてやるから待つてなあ？」

その優しい言葉に

少し安らいだもの

待つているのも落ち着かないと思い

アタシはエチケット袋を握りしめ辰弥の車に乗つた

車の中には優大君がいて

アタシの手に握られた
エチケット袋を見るなり

・・・爆笑した

少しア然となつたからか
緊張が和らいで周りに
目がいくよくなつた

「あれ？ 悠布も今日付いてくるつていつてなかつた？」

アタシの何氣ない質問に辰弥は何氣なく

「美玲の所行つたから戻つてこね～なあ」

美玲ちゃんは悠布と

同じ年の子で

ずっと女にだらしなかつた悠布が初めて落ち着いた
彼女だった

アタシも白くて綺麗な肌だねと言われた事はあるけど

美玲ちゃんの真珠のような白い艶のある肌を見た後では何も言えなくなるくらい

白い肌で

細長く日本人離れした

しなやかな体の女性だった

お父さんがカナダの人だと聞いていた

美玲ちゃんは悠布の働く店の近くでキャバをしていて

悠布と美玲チャンには
共通の友人がいて

ある日いつもの様に
友人が友人を呼び
飲んでいた所に
フラつと現れた

ミンナで飲むようになった
何度めかの時

美玲チャンが酔った勢いのようなもので

「好き〜」

おもむろに告白した

それに対して悠布は

「うん」

それだけだった

アタシも、その場にいたが

あの時の悠布の『うん』は今までの女の子達と変わらず

美玲チャンの『好き』の気持ちに比例していない感じがあった

だけど、

それはアタシの勘違いで

今は誰が見ても

2人は互いを大事に思う関係になつていて

妹として

とても嬉しい事だった

そんな事を考えていたら

受験した高校についていた

あまりにも

合格発表と掛け離れた事を考えていたアタシは

掲示板を見るための

心の準備が出来てなかつた

辰弥が車のドアを開けてくれて手を繋いでくれた

「待つて？待つてね？ゴメンね？」

うろたえたアタシに優大君が

「お前にさ、勉強を教えた奴は、お前をよく知つてゐる奴なんだから
自信持てよ？一緒にいるから」

その優しい言葉に

気持ちが落ち着いたから

アタシは歩きだせた

アタシ達は3人で掲示板を見に行つた

掲示板には沢山の

数字が書いてあつたはずだけど

アタシには、ピンクの字が一つだけ見えた

実際には黒字だつたけど

アタシには

掲示板に桜が咲いているように見えた

アタシは驚くわけでもなく

笑うわけでもなく

ただ、沈黙していた

凄く嬉しかったのに

アタシは嬉しすぎて声がでなかつた

喉がつまりついて

声をだそうとすればする程何も言えなかつた

それに気付いた2人は

爆笑しながらも

胴上げしようとしてくれた

今でもあの時の2人の笑顔は忘れられない

その日は朝がきても眠ろつとする人がいない程ミンナで遊びまわつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9983b/>

ヌクモリ

2010年12月31日21時21分発行